



AVIDの描く未来像～AVID Everywhereに込められた想い～

AVID Everywhereというキーワードの発表からすでに1年。Pro Toolsのライセンス形態がサブスクリプションベースへ変更されたりと、大きな変革が訪れているAVID。キーワードとなるSubscription、Cloud Collaboration、Market Placeという3つのキーワードに沿って未来を占ってみたい。

大前提となる『AVID Everywhere』。そのAVIDという「Everywhere」は実際の場所を指しているのではなく、クリエイターを指していると考えてもらうとわかりやすい。世界中のクリエイターを結びつけ、新しいマーケットの創造、そして新しい作品の誕生のための方法を提供することになる。インタラクティブメディアが進化した現代、映像だけ音声だけというソリューションではなく、両者を統合したコミュニティの創造がこのAVID Everywhereの正体である。それを実現するためのツールとして『Cloud Collaboration』が発表されている。そしてその計画の最終目標地点はそのコミュニティで生まれた作品がユーザーへ直接届くところまでのビジョンで語られている。その部分を担うのがもう一つのキーワードである『Market Place』だ。乱暴に言ってしまうと、Pro Toolsでパუნスした完成作品が直接iTune Storeに登録されるようなイメージだろうか？AVIDではこのような作品を対価へと変えることをマネタイズと呼んでいる。『クリエイト＝制作』と『マネタイズ＝対価の還元』が相互にリンクして循環することでAVID Everywhereは本当の意味での完成を迎えることとなる。ユーザーとメーカーそれぞれがWin-Winの関係になれるということだ。

知ってる？ 未来を描くために必要な布石としてのSubscription の導入

一言で言ってしまうと前述のCloud Collaboration、Market Placeの維持運営のための変更といえるのが、Subscription制の導入。AVIDの勝手な都合だ！と言ってしまうまでも可知ない。しかしAVIDと共に描く未来への先行投資と考えればそれほど悪いものではないかもしれない。なぜなら、AVIDは自社の利益だけではなく業界全体の活性化、ユーザーとのWIN-WINの関係の構築をはっきりと打ち出しているのだから。

これまでのビジネスモデルと違い、先に対価をユーザーから預かりサービスを提供するという仕組みがSubscriptionだ。実際にCloud Collaboration、Market Placeが本格的に稼働を始め、世界中のユーザーがそのソリューションを活用し始めれば、Pro Toolsのライセンスはまさにそれらのサービスへの接続用のキーを兼ねることになると思う。AVIDはそこから一步先のビジョンを描き、コラボレーションツールとしての意味合いを強めることで、その魅力をいっそう引き出していると感じる。

期間限定のライセンスを購入するシステムへとそのライセンス形態を変革させたことで、これまでの『魅力的な新機能が搭載された』からバージョンアップ費を支払って下さい。という形態から『魅力的なサービスを提供する』ので対価をお支払いください。というモデルへと変革を遂げる。このサービスにはもちろん機能の追加、Cloud Collaborationのサービス提供といったことも含まれる。完成した新機能は順次追加され、今まで以上に頻繁なバージョンアップが行われることになる。これには、もう一つ裏の側面も有り、全てのユーザーに共通のサービスを提供することとなるCloud Collaborationの安定的な提供のためには、クライアントであるアプリケーションのバージョン統一は不可欠であると言う技術的側面も含まれる。先にその対価を預かることで、それにユーザーが満足できるレベルでのサービスを提供する。その対価に見合わないと判断した場合は翌年購入しなければそれまでというわけだ。

今こそHDX切替の時～今乗り換えるべき理由は明確に存在する～

現在TDMシステム（HD core、HD accel、HD processの世代）は、まだ世界中に2万セット以上が稼働しているとAVIDからアナウンスされている。国内でも相当数のTDMシステムが今も稼働しているが、やはりハードウェアもソフトウェアも進化を続ける製品。どれだけ使い慣れた愛着のあるシステムだとしても、残念ながらデジタルのシステムを治しながら利用するということはかなりの困難を伴う。

実際にAVIDからは、製造完了後5年で訪れるサポート終了の案内が届き始めている。2015年9月には192 I/O、96 I/O等のBluefaceのインターフェース群が、そして2016年11月-12月には遂にHD core/accel/processの終了が予定されている。また、それらのシステムを動かしているMacも同様に製造完了から5年でサポートを打ち切っている。このような外的要因からもHDXへ乗り換えが必須となるタイミングは刻一刻と近づいてきているが、逆に言えばHDXはすでに登場から3年以上が経過し、ホストであるMacProも黒の筐体になってすでに1年半、全てが刷新され64bit化を果たしたPro Tools 11からも2年が経過している。不安視されていた動作の安定性に関してもプログラムのバグもほぼ解消され、快適な環境を構築することが可能と言い切るだけの稼働実績を積み上げた。AVIDとしても一世一代の大革命であるHD I/Oの発表から始まった64bit化へのプロセスをしっかりと時間を掛けて行った結果だ。すでに、更新に対しての不安要素はいくつかの更新を諦めたメーカーのプラグインのみと言い切ってしまうてもいい状況となっている。今こそ64bit化により全てがブラッシュアップされた快適な環境へ移行する時ではないだろうか？為替レートの円安による価格更新も可能性として真実味を帯びてきている状況、2016年4月には消費税の10%化もファクターとして存在する。まさに今がチャンスといえるタイミングと言える。

05 text by 前田 洋介 ROCK ON PRO Product Specialist

レコーディングエンジニア、PAエンジニアの現場経験を活かしプロダクトスペシャリストとして様々な商品のデモンストレーションを行っている。映画音楽などの現場経験から、映像と音声を繋ぐワークフロー運用改善、現場で培った音の感性、実体験に基づく商品説明、技術解説、システム構築を行っている。



Price List

ProTools HDX

現在のPro Toolsシステムに於けるフラッグシップがHDX。従来のTDM世代のカード比で4倍のバウを持ち、256voiceを実現したモンスタープロセッサーHDXをコアとした業界標準機。圧倒的なレイテンシーの低さが最大の魅力!!

	OMNI	16x16 Digital	8x8x8	16x16 Analog	MADI
ProTools HDX	¥1,263,600	¥1,263,600	¥1,393,200	¥1,522,800	¥1,522,800
HD Native	¥632,880	¥632,880	¥759,240	¥885,600	¥885,600

HDX Exchange	to OMNI	to 16x16 Digital	to 8x8x8	to 16x16 Analog	to MADI	Card Only	to HDX1	to HDX2
from HD1w I/O	¥1,011,960	¥1,011,960	¥1,134,000	¥1,263,600	¥1,263,600	from HD1	¥1,011,960	-
from HD2w I/O	¥885,600	¥885,600	¥1,011,960	¥1,134,000	¥1,134,000	from HD2	¥885,600	¥1,641,600
from HD3w I/O	¥759,240	¥759,240	¥885,600	¥1,011,960	¥1,011,960	from HD3	¥759,240	¥1,522,800
HDX2 Exchange								
from HD3w I/O	¥1,522,800	¥1,522,800	¥1,641,600	¥1,771,200	¥1,771,200			

HDN Exchange	to OMNI	to 16x16 Digital	to 8x8x8	to 16x16 Analog	to MADI
from Mbox Pro	¥505,440	¥505,440	¥632,880	¥759,240	¥759,240
from OOX Series	¥505,440	¥505,440	¥632,880	¥759,240	¥759,240

※2015年5月末日時点 ※表内の価格は全て税込 ※上記以外のパンドル、Exchangeの組み合わせもございます、お問い合わせください。

ProTools HDX Exchange

これまでのTDMユーザーに対しては交換アップグレードが提供されている。新規導入よりもコストセーブしてHDXシステムを手に入れることが可能。使用中のカードの枚数に応じてプランが用意されているが、リストにない組合せも可能なのでは是非ともお問い合わせいただきたい。

ProTools HD Native

HDXと同一のインターフェースを利用できるDSP無しのホストデバイスがこのHD native。音質は上位機種と同等、プロセッシングパワーはNativeプロセスのみとすることでコストを抑えたモデルだ。最大2chの超低レイテンシーモードの搭載がポイント。

ProTools HD Native Exchange

digi 002/003/MBox proのユーザーに対してはHD nativeへのアップグレードパスが準備されている。上位の機種へお得に交換を行うことのできるBig Chanceだ。アプリケーションもLEグレードからHDグレードへアップグレードとなるのが最大のポイント!!

ROCK ON PRO ≡ Shibuya 03-3477-1776 / Umeda 06-6131-3078